

漢法苞徳塾資料	No. 145
区分	資料
タイトル	鍼灸臨床と体表所見について - 古典の立場から -
著者	八木素萌
作成日	1996.07.23

◎古典からの関連箇所引用

☆靈枢・本藏（卷7第47）

「……経脈者・所以行血氣而營陰陽・濡筋骨・利關節者也・衛氣者・所以温分肉・充皮膚・肥腠理・司閔闔者也・志意者・所以御精神・収魂魄・適寒温・和喜怒者也。是故血和則経脈流行・營覆陰陽・筋骨勁強・關節清利矣。衛氣和則・分肉解利・皮膚調柔・腠理緻密矣。志意和則精神專直・魂魄不散・悔怒不起・五藏不受邪矣。寒温和則六腑化穀・風痺不作・経脈通利・肢節得安矣。……肺合大腸・大腸者・皮其應・心合小腸・小腸者・脈其應・肝合膽・膽者・筋其應・脾合胃・胃者・肉其應・腎合三焦膀胱・三焦膀胱者・腠理毫毛其應。……」

☆靈枢・九鍼十二原（卷1第1）

「……今夫五藏之有疾也・譬猶刺也・猶汚也・猶結也・猶閉也 刺雖久猶可拔也・汚雖久猶可雪也・……閉雖久猶可決也。或言久疾之不可取者・非其説也。夫善用鍼者・取其疾也・猶拔刺也・猶雪汚也・猶解結也・猶決閉也・疾雖久猶可畢也。言不可治者・未得其術也……」

☆靈枢・経脈（卷3第10）

「……経脈者・所以能決死生・処百病・調虚実・不可不通。……」

☆靈枢・小鍼解（卷1第3）

「……皮肉筋脈各有所処者・言経絡各有所主也……」

☆靈枢・九鍼十二原（卷1第1）

「……刺諸熱者・如以手探湯・刺寒清者・如人不欲行……」

◎実之・泄之・除之・虚之の4大基本原理

☆靈枢・九鍼十二原（卷1第1）

「……凡用鍼者・虚則実之・滿則泄之・宛陳則除之・邪勝則虚之……」

☆靈枢・小鍼解（卷1第3）

「……所謂虚則実之者・氣口虚而当補之也・滿則泄之者・氣口盛而当瀉之也・宛陳則除之者・去

血脈也・邪勝則虚之者・言諸經有盛者・皆瀉其邪也。……」

☆素問・鍼解（卷 14 第 54）

「……刺虚則実之者・鍼下熱也・氣実乃熱也。滿而泄之者・鍼下寒也・氣虚乃寒也。菀陳則除之者・出惡血也。邪勝則虚之者・出鍼勿按。……」

☆靈樞・九鍼十二原（卷 1 第 1）

「…五藏五腧・五五二十五腧・六府六腧・六六三十六腧・經脈十二・絡脈十五・凡二十七氣・以上下・所出為井・所溜為滎・所注為俞・所行為經・所入為合・二十七氣所行・皆在五腧也。節之交・三百六十五會・知其要者・一言而終・不知其要・流散無窮・所言節者・神氣之所遊行出入也・非皮肉筋骨也。……」

◎刺法論

☆靈樞・本輸（卷 1 第 2）・

「……春取絡脈諸榮大經分肉之間・甚者深取之・間者淺取之・夏取諸腧孫絡肌肉皮膚之上・秋取諸合・余如春法・冬取諸井諸腧之分・欲深而留之・此四時之序・氣之所処・病之所舍・藏之所宜。……」

☆靈樞・小鍼解（卷 1 第 3）

「……邪勝則虚之者・言諸經有盛者・皆瀉其邪也。……」（三十七難参照の事）

☆靈樞・小鍼解（卷 1 第 3）

「……氣至而去之者・言補瀉氣調而去之也・調氣在于終始一者・持心也。節之交三百六十五會者・絡脈之滲灌諸節者也。所謂五藏之氣已絶于内者・脈口氣内絶不至・反取其外之病処與陽經之合・有留鍼以致陽氣・陽氣至則内重竭・重竭則死矣・其死也無氣以動・故静。所謂五藏之氣已絶于外者・脈口氣外絶不至・反取其四末之輸・有留鍼以致其陰氣・陰氣至則陽氣反入・入則逆・逆則死矣・其死也陰氣有余・故躁。……」

～～鍼のコツ～～（参照－難經 1 2 難）（参照一九鍼十二原）

☆靈樞・邪氣藏府病形（卷 1 第 4）

「……故邪入于陰經・則其藏氣実・邪氣入而不能客・故還之於府・故中陽則溜于經・中陰則溜于府……」

（◇診察上基本的に重要）

☆靈樞・邪氣藏府病形（卷 1 第 4）

「……夫色脈与尺之相応也・如桴鼓影響之相応也・不得相失也・此亦本末根葉之出候也・故根死則葉枯矣・色脈形肉・不得相失也。……」（参照一八難）

☆靈枢・邪氣藏府病形（卷1第4）

「……脈急者・尺之皮膚亦急・脈緩者・尺之皮膚亦緩・脈小者・尺之皮膚亦減而少氣・脈大者・尺之皮膚亦賁而起・脈滑者・尺之皮膚亦滑・脈濇者・尺之皮膚亦濇・凡此變者・有微有甚・故善調尺者・不待於寸・善調脈者・不待於色・能參合而行之者・可以為上工・上工十全九・行二者・為中工・中工十全七・行一者・為下工・下工十全六……」（参照－難經13難）

◎治療法選択論

☆靈枢・邪氣藏府病形（卷1第4）

「……病之六變者・刺之奈何……諸急者多寒・緩者多熱・大者多氣少血・小者血氣皆小・滑者陽氣盛・微有熱・濇者多血少氣・微有寒……刺急者深内而久留之・刺緩者・浅内而疾發鍼・以去其熱・刺大者・微瀉其氣・無出其血・刺滑者・疾發鍼而浅内之・以瀉其陽氣・而去其熱・刺濇者・必中其脈・隨其逆順而久留之・必先按而循之・已發鍼・疾按其痛・無令其血出・以和其脈・諸小者陰陽形氣俱不足・勿取以鍼・而調以甘藥也……」

（ここで重要と思われるのは六變として病態を捉えていることだろう。急・緩・大・小・滑・濇に区分して、それぞれに対応した鍼法を記述していることであろう。この状態が指示している病理的なものは、「寒・熱・多氣少血・血氣皆少・陽氣盛微有熱・多血少氣微有寒」であるとしている事であろう。これは「根結」の五通りの気の状態に対応した鍼法の記述と照らし合わせて臨床運用が試みられなければなるまい）

☆靈枢・寿夭剛柔第6

「……病九日者三刺而已・病一月者・十刺而已……」（治療期間予測原理）。

「……黄帝曰：余聞刺有三變・何謂三變。伯高答曰：有刺榮者・有刺衛者・有刺寒痺之留經者。黄帝曰：刺三變者奈何。伯高答曰：刺榮者出血・刺衛者出氣・刺寒痺者内熱。黄帝曰：榮衛寒痺之為病奈何。伯高答曰：營之生病也・寒熱少氣・血上下行。衛之生病也・氣痛時來時去・怫鬱賁響・風寒客于腸胃之中。寒痺之為病也。留而不去・時痛而皮不仁。……」（3變刺）

☆靈枢・寿夭剛柔第6

「……刺榮者出血・刺衛者出氣・刺寒痺者内熱……」

「……榮之生病也・寒熱少氣・血上下行・衛之生病也・氣痛時來時去・怫鬱賁響・風寒客于腸胃之中・寒痺之為病也・留而不去・時痛而皮不仁・黄帝曰：刺寒痺内熱奈何。岐伯答曰：刺布衣者・以火焯之・刺大人者・以藥熨之……」

（榮之生病には寒熱少氣。衛之生病には氣痛時來時去・怫鬱賁響・風寒客于腸胃之中。寒痺病には留而不去・時痛而皮不仁。などと特長付けている、刺法的な特質をも関連させて記述している。…三變刺…）

◎補瀉論の基本

☆素問・通評虛実論第 28

「……邪氣盛則実・精氣奪則虚……」

☆靈樞・根結第 5

「……岐伯曰・形氣不足・病氣有余・是邪勝也・急瀉之。形氣有余・病氣不足・急補之。形氣不足・病氣不足・此陰陽氣俱不足也・不可刺之・刺之則重不足・重不足則陰陽俱竭・血氣皆尽・五藏空虚・筋骨髓枯・老者絶滅・壯者不復矣。形氣有余・病氣有余・此謂陰陽俱有余也・急瀉其邪・調其虚実。故曰有余者瀉之・不足者補之・此之謂也……」

(これには汪機の「鍼灸問対」の中での平明な注釈がある)

☆靈樞・小鍼解第 3

「……往者・為逆者・言氣之虚而小・小者・逆也・来者為順者・言形氣之平・平者順也・明知逆順・正行無間者・言知所取之処也。迎而奪之者瀉也・追而濟之者・補也。……」

☆靈樞・論疾診尺第 74

「……岐伯曰・審其尺之緩急小大滑濇・肉之堅脆・而病形定矣。……尺膚滑・其淖澤者・風也。尺肉弱者・解佻。……尺膚滑而澤脂者風也。尺膚濇者・風痺也。尺膚癩如枯魚之鱗者・水泆飲也。尺膚熱甚・脈盛躁者・病温也。其脈盛而滑者・病且出也。尺膚寒其脈小者・泄・少氣。尺膚炬然・先熱後寒者・寒熱也。尺膚先寒・久大之而熱者・亦寒熱也。……」

☆靈樞・論疾診尺第 74

「……診目痛・赤脈從上下者太陽病。從下上者陽明病。從外走内者・少陽病。診寒熱・赤脈上下至瞳子・見一脈一歲死・見一脈半・一歲半死・見二脈・二歲死・見二脈半・二歲半死・見三脈三歲死。……」

◎診察論

☆靈樞・邪客第 71

「……黄帝問于岐伯曰：人有八虚・各何以候。岐伯答曰・以候五藏。……肺心有邪・其氣留于兩肘；肝有邪・其氣流于兩腋；脾有邪・其氣留于兩髀；腎有邪・其氣留于兩膕。凡此八虚者・皆機関之室・真氣之所過・血絡之所游・邪氣惡血・固不得住留・住留則傷筋絡骨節機関・不得屈伸・故痠攣也……」(八虚診)

☆

☆靈樞・海論第 33

「…… ……」

☆素問・金匱真言論第 4

「…… ……」

☆素問・調經論第 62

「…… ……」

☆素問・藏氣法時論第 22

「…… ……」

☆素問・六節藏象論第 9

「……………」

☆素問・拳痛論第 39

「……經脈流行不止・環周不休・寒氣入經而稽遲・泣而不行・客於脈外・則血少・客於脈中則氣不通・故卒然而痛。……寒氣客於脈外・則脈寒・脈寒則縮蜷。縮蜷則脈絀急・絀急則外引小絡・故卒然而痛・得炅則痛立止。……寒氣客於經脈之中・與炅氣相薄・則脈滿・滿則痛而不可按也。……寒氣客於衝脈・衝脈起於閔元・隨腹直上・寒氣客則脈不通・脈不通則氣因之・故喘動应手矣。……寒氣客於厥陰之脈・厥陰之脈者・絡陰器繫於肝・寒氣客於脈中・則血泣脈急・故脇肋與少腹相引痛矣。……」

☆素問・皮部論第 56

「……百病之始生也・必先於皮毛・邪中之則・腠理開・開則入客於絡脈・留而不去・伝入於經・留而不去・伝入於府・廩於腸胃・邪之始入於皮也・泝然起毫毛・開腠理・其入於絡也・則絡脈盛色變・其入客於經也・則感虚乃陷下・其留於筋骨之間・寒多則筋攣骨痛・熱多則筋弛骨消・肉腠破・毛直而敗……」

☆素問・五藏生成第 10

「……人有大谷十二分・小谿三百五十四名・少十二俞・此皆衛氣之所留止・邪氣之所客也……」

☆素問・陰陽離合論第 6

「……是故三陽之離合也・太陽為開・陽明為闔・少陽為樞。三經者不得相失也……是故三陰之離合也・太陰為開・厥陰為闔・少陰為樞。三經者不得相失也……」

「…開闔樞…」論

☆靈樞・根結第 5

「……太陽為開・陽明為闔・少陽為樞・故開折則肉節流而暴病起矣。故暴病者取之太陽……闔折則氣無所止息而痿疾起矣・故痿疾者取之陽明……樞折則骨繇而不安于地・故骨繇者取之少陽・

……太陰為開・厥陰為闔・少陰為樞・故開折則倉廩無所輸膈洞・膈洞者取之太陰……闔折則氣絕而喜悲・悲者取之厥陰……樞折則脈有所結而不通・不通者取之少陰……」

『靈樞』根結第 5 の開闔樞論。

☆素問・四時刺逆從論第 64

「……春氣在經脈・夏氣在孫絡・長夏氣在肌肉・秋氣在皮膚・冬氣在骨髓中……」

「気の所在論」

☆素問・六節藏象論第 9

「心一其華在面・其充在血脈……肺一其華在毛・其充在皮……腎一其華在髮・其充在骨……肝一其華在爪・其充在筋……脾胃大腸小腸三焦膀胱一其華在唇四白・其充在肌……」

(五華論)

☆素問・金匱真言論第 4

「……………」

☆素問・調經論第 62

「…… ……」

☆素問・藏氣法時論第 22

「…… ……」